

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320073

研究課題名(和文) ナイル諸語の統語論、情報構造と言語形式の研究

研究課題名(英文) Syntax in Nilotic Languages, Information Structure and Linguistic Forms

研究代表者

稗田 乃(Hieda, Osamu)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：90181057

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,800,000円

研究成果の概要(和文)：ナイル諸語の統語論はいまだ十分に研究されていない。本申請による研究では、研究代表者と協力者が現地調査にもとづき、ナイル諸語の統語論資料を収集、公開した。特に、統語構造では説明できない現象について、統語論と情報構造の相互作用の観点から研究した。ナイル諸語研究者のための国際研究プラットフォームを構築した。英文によるナイル諸語研究シリーズを刊行した。2014年にフンボルト大学の協力をえて、国際研究集会を開催した。

研究成果の概要(英文)：Members of this project supported by JSPS (KAKENHI) conducted a field research on Nilotic languages and published the syntactic data. Not only Nilotists but also general linguists are looking forward to the Nilotic syntactic data to fill a gap in cross-linguistic studies of syntax. The members were concentrating on the project to study interactions between syntax and information structure. This project supplies an academic platform to an international community of scholars who study Nilotic languages. Many scholars from the community contributed papers to the series named as 'Studies in Nilotic Linguistics' published from the platform. In 2014, the international academic meeting 'Information Structure in Africa, with an international workshop on Nilotic Linguistics' was organized by Osamu Hieda. The participants of the meeting included specialists on Information Structure and Nilotists from Japan, Germany, U.K., Denmark, Finland, U.S.A., and Kenya.

研究分野：言語学

キーワード：言語学 アフリカ言語学 統語論 情報構造

1. 研究開始当初の背景

(1) ナイル諸語は、主としてスーダン、エチオピア、ウガンダ、ケニア、タンザニアで話される系統が同じとされる諸言語である。研究開始当時、系統関係の研究は比較的行われていたが、記述研究に関しては、形態論の概説のみであった。研究開始当初は、特に統語論に関して、当申請に先立つ科研「ナイル諸語形態統語論の共時的、通時的比較研究」(研究代表者：稗田乃)がナイル諸語統語論の研究のさきがけと言えるものであった。統語論が言語研究の中心となり発展していくなかで、徐々に明らかになりつつあった、ナイル諸語の、アフリカ諸語からの観点からだけでなく通言語的観点からも、特異な統語論の資料が、ナイル諸語研究者のみならず一般言語学研究者に求められていた。

(2) アフリカ諸語の研究の最新動向が情報構造の研究に向かいつつあった。ドイツを中心として世界のさまざまな研究機関においてアフリカ諸語の情報構造を研究するプロジェクトが立ち上がりつつあった。本申請が目的とするナイル諸語の統語論研究は、統語構造では説明できない現象を情報構造と統語論の相互作用として研究するものであり、それは、アフリカ諸語研究の最新動向と一致していた。

2. 研究の目的

(1) 研究代表者(稗田)、協力者(河内)、また、ドイツ在住協力者(ハイネ、ケーニヒ)が現地調査をおこない、ナイル諸語に属する言語の統語論を記述し、その詳細な資料を公開する。

(2) ナイル諸語間で比較することにより、ナイル諸語の統語構造を明らかにする。

(3) とくに、統語構造では説明できない現象を統語論と情報構造の相互作用の観点から、さらに意味論を考慮して研究する。そのための資料を現地調査で収集する。統語構造だけでは説明できない現象として以下の言語現象を扱う。

語順。従来、ナイル諸語の語順は、主語動詞 目的語の通言語的によくみられるパターンであると考えられてきた。実際の調査によれば、そう単純ではないことが明らかになりつつあった。そこで、語順、正確には、文を構成する要素(constituent)の配列は、情報構造により決定されるのではないかという仮説を検討する。

ナイル諸語は、主格を有標とする言語であるとの説(Koenig)がある。形態論の有標性と語順という統語論とのあいだに関係は、構成素の配列から説明できることを検討する。

ナイル諸語において、ゼロマーキング(何も言わないこと)が統語論、あるいは、語用論においてどのような役割を果たしているかを明らかにする。

抽象化がすすんだ統語論にたいして、統語構造で説明できない現象を研究対象にして、

語用論の抽象化をすすめることで、統語論と語用論の相互作用を探る。

(4) アジア・アフリカ言語文化研究所に構築したナイル諸語研究プラットフォームを活用し、日本、ドイツを核としたナイル諸語研究国際ネットワークを発展させる。なお、当申請の研究により得られた成果は、現地調査に基づく新たな資料とともに、研究者コミュニティに公開する。

3. 研究の方法

(1) ナイル諸語に属する言語の統語論を記述するために、研究代表者(稗田)、協力者(河内)、国外協力者(ハイネ、ケーニヒ)は、いまだに調査研究されていない言語の現地調査をおこなう。

(2) 現地調査で収集した資料を公開するために、アジア・アフリカ言語文化研究所内に構築したナイル諸語研究国際プラットフォームを活用して、収集した資料を国際研究者ネットワークに提供する。また、国際研究者ネットワークに参加する上記3名以外の研究者が所有する言語資料を、ナイル諸語国際研究プラットフォームを活用して公開、共有をはかる。

(3) ナイル諸語研究国際プラットフォーム上において、ナイル諸語の統語論、とくに統語構造では説明できない言語現象を、情報構造と統語論の相互作用の観点から議論をおこなう。また、最終年度に、フンボルト大学の協力のもとに、国際研究集会を開催する。ナイル諸語研究国際プラットフォームに参加した研究者のなかから、研究者が日本に集まり直接議論をおこなうことによりナイル諸語の統語論を深化発展させ、将来の展望をひろく。

4. 研究成果

当申請による研究成果は、すべて英文で発表することを原則としている。研究成果は、海外で開催された国際学会での発表や雑誌論文の掲載や図書の公刊によって、ひろく国際的に公開した。その成果は、下の主な発表論文等のとおりであるが、それらの概要を以下にまとめる。「生成文法」の登場から、人間の文を生成する能力は、統語論という1つの独立した装置に基づいていると考えられている。しかし、実際にはなされている言語資料を検討すると、統語論内部ですべての文が生成されないことがわかる。言葉をかえて言うと、統語構造で説明することはできない言語現象が存在することがわかってきた。繰り返して、当申請による研究の目的は、統語構造で説明できない言語現象を情報構造と統語論の相互作用の観点から解明することである。

(1) ナイル諸語に属する言語の現地調査に基づく統語論の記述に関して、主として3編の図書による貢献をおこなった。1つは、研究代表者(稗田)によるクマム語(ナイル語

西方言に属する言語)の文法の公刊である。クマム語は、それまで、名前は知られていたが文法書も辞書もなかった(辞書は研究代表者(稗田)が先行する科研により公刊した)。この文法書は、総382頁からなるが、その特徴は、従来の文法書とはことなり、情報構造と統語論の相互作用の観点から、統語構造では説明できない言語現象の解明を試みるものである。中心になる議論は、従来、統語論で説明されてきた語順が、じつは、統語構造では説明できないことを明らかにしたうえで、語、正確には文構成素の文における順序は、情報構造が決定することを主張した。また、指示詞や動詞に付加される人称接辞による照応も、統語構造では説明できず、節をこえた情報構造で決定されることを明らかにした。<参考文献>Hieda, Osamu. 2013. *A Grammar of Kumam: The interaction between syntax and pragmatics*. (Studies in Nilotic Linguistics vol. 7), pp. 382. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form: A Theory of Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.

第2のものは、国外協力者(KoenigとHeine)によるアギエ語(ナイル語南方に属する言語)の文法書の公刊である。アギエ語は、文法書も辞書も公刊されていなかっただけでなく、すでに「死語の脅威にさらされている」言語でもある。2人の国外協力者は、先行科研では研究協力者であったが、ドイツ国内に研究補助金を得たため、当申請では分担金を派生しない協力者である。ただ、その研究成果を当申請によって構築した研究プラットフォームを活用して、研究資源を国際研究者ネットワークで共有した。この文法書は、182頁からなるが、その特徴は、文を生成するために、統語論という独立した装置の外側に談話文法 Discourse Grammar と彼らが呼ぶ装置を想定することである。<参考文献>Kaltenboeck, Gunther, Bend Heine, and Tania Kuteva. 2011. On thetical grammar. *Studies in Language* 35, 4: 848-93. Koenig, Christa, Heine, Bernd & Karsten Legere. 2015. *The Akie Language of Tanzania. A Sketch of Discourse Grammar*. (Studies in Nilotic Linguistics vol. 9). pp. 182. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

第3のものは、研究代表者(稗田)が編集した故ヌーナン博士が残したランゴ語資料の公刊である。当申請の目的の1つは、研究者コミュニティに公開されずに蓄えられている資料を国際研究者ネットワークが共有できるように公開することである。ランゴ語(ナイル語西方に属する言語)のこの資料は、ヌーナン博士が公刊した文法書で扱われ

ていないランゴ語の話し言葉の資料を含んでいる。<参考文献>Hieda, Osamu. 2013. (ed.) *Michael Noonan's Linguistic Materials of Lango*. (Studies in Nilotic Linguistics vol. 6), pp. 250. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. Noonan, Michael. 1992. *A Grammar of Lango*. Berlin: Mouton de Gruyter.

(2)ナイル諸語統語論研究の成果は、主要な6編の雑誌論文と1件の国内と2件の国際的学会における口頭発表で公開した。

第1の雑誌論文は、クマム語におけるエヴィデンシャリティ(話し手が情報を伝達する際に、その情報を得た情報源をどのように言語的に表現するか)を明らかにした。具体的にはゼロマーキングの補文標識を使うことにより、話者は、情報源が直接的なものであることを表示する。エヴィデンシャリティは、情報構造の研究とはかかわりなく議論されてきたが、情報構造の表示とエヴィデンシャリティの表現は、じつは、類似している。<参考文献>Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press. Hieda, Osamu. 2015. 'Complementation and Evidential strategy in Kumam', *Journal of Asian and African Studies* 89: 27-46.

第2の雑誌論文は、アチョリ語(ナイル語西方に属する)におけるフォーカス構造を明らかにした。文中に無標のフォーカスのための特定の位置が存在することを証明した。この論文は、ゲーテ大学での招待講演での口頭発表を洗練させたものである。招待講演では、無標のフォーカスのほかに、アチョリ語は、対比フォーカスのための語彙的装置が存在することを示したうえで、対比フォーカスを与えられた指示物が節における、また、節をこえた指示をコントロールすることを提案した。

第3の論文は、ランゴ語にトピック化と左方移動の2つの移動規則があることを示した。トピック化と左方移動は、文中の構成素を文の左端に移動させるという、正確には、ある構成素が文の左端の位置を占めるといふ、よく似た統語論的特徴をもつ。しかし、ランゴ語のトピック化と左方移動は、統語論的にも、語用論的にもまったくことなるものである。トピック化は、構成素の移動を伴っているが、左方移動は、移動を伴っていない。これらはまったくことなる統語構造をもっている。しかし、統語構造から予想される制限は、述語の意味により破られることが判明した。この事実は、統語論がまったく他のモジュール、ここでは意味論と独立することはないことを示している。

第6の論文は、クマム語の独立代名詞が単に指示の機能をもつだけでなく、トピックをシフトさせる機能をもつことを明らかにした。

研究協力者による第4の論文は、サビニ語（ナイル語南方言に属する）におけるコンピュータ文を情報構造の観点から説明を試みたものである。

(3) 当申請によるナイル諸語統語論の研究が一般言語学に与える貢献は以下のようなものがある。1つはフォーカス構造についてである。文は、1つ以上のフォーカスであり、たとえそれがどのような種類のフォーカスであろうとも、かならずもたなければならない。この普遍的仮説を、アフリカで話されているナイル諸語の1つであるクマム語やアチヨリ語の資料をもちいて証明した。また、文の核を構成する要素が無標のフォーカスをもつなら、文の核の右端に置かれ、文の核を構成しない要素は、核の外側の右端に置かれることを主張した。この主張は、文の核の内と外という概念を一般言語学に提案するものである。トピック化と左方移動を区別することは、たんに統語構造では説明できない言語現象が存在することを発見し、それを説明するためには、情報構造の観点と意味論の観点を無視することができないことを主張した。〈参考文献〉

Erteschik-Shir, Nomi. 2007. *Information Structure: The Syntax - Discourse Interface*. London: Oxford University Press. Hieda, Osamu. 2014b. 'Independent pronouns and topic shift in Kumam', in Hieda O. (ed.) *Recent Advances in Nilotic Languages*, pp. 15-32. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. Hieda, Osamu. 2015. 'Topicalization and left dislocation in Lango', in Hieda, O. (ed.) *Information Structure and Nilotic Languages*, pp. 77-96. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. Hieda, Osamu. 2015. 'Focus structure in Acooli - Unmarked focus position -', *Asian and African Languages and Linguistics* 9: 131-152. URI: <http://hdl.handle.net/10108/8048>

Van Valin, Robert D & Randy J. LaPolla. 1997. *Syntax: structure, meaning, and function*. New York: Cambridge University Press.

(4) これらの研究成果をアジア・アフリカ言語文化研究所内に構築した研究プラットフォームを利用して海外に向けて発信した。また、最終年度に国際研究集会を開催することで、これらの研究にたいする評価を受けた。

これらの成果は、国際的なナイル諸語研究者コミュニティでの評価を受けただけでなく、一部は一般言語学のコミュニティにおいても評価を受けた。今後の展望として、研究代表者(稗田)は、27年度秋に予定されているこの研究者コミュニティ最大の学会である Nilo-Sahara Linguistic Colloquium で招待講演を要請されている。この機会を用いて

当申請による研究成果を発信していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6件)

Hieda, Osamu. 2015. 'Complementation and Evidential strategy in Kumam', *Journal of Asian and African Studies* 89: 27-46.

Hieda, Osamu. 2015. 'Focus structure in Acooli - Unmarked focus position -', *Asian and African Languages and Linguistics* 9: 131-152. URI: <http://hdl.handle.net/10108/8048>

Hieda, Osamu. 2015. 'Topicalization and left dislocation in Lango', in Hieda, O. (ed.) *Information Structure and Nilotic Languages*, pp. 77-96. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Kawachi, Kazuhiro. 2015. 'Copula constructions in Kupsapiny (Kupsapiiny)', in Hieda, O. (ed.) *Information Structure and Nilotic Languages*, pp. 97-116. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Hieda, Osamu. 2014a. 'Number in Nilotic: a hypothetical consideration from historical perspective', in Hieda O. (ed.) *Recent Advances in Nilotic Languages*, pp. 15-32. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Hieda, Osamu. 2014b. 'Independent pronouns and topic shift in Kumam', in Hieda O. (ed.) *Recent Advances in Nilotic Languages*, pp. 15-32. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

〔学会発表〕(計 3件)

稗田乃、「クマム語のフォーカス構造について」、ナイル・エチオピア学会、平成26年4月20日、広島

Hieda, Osamu. 'Complementation and evidential strategy in Kumam', Nilo-Saharan Linguistic Colloquium 2013, 2013 May 22-24, University of Cologne, Cologne (Germany)

Hieda, Osamu. 'Focus Structure and the contrastive focus marker aye in Acooli', Afrikanistisches Kolloquium, 2012 November 9, Goethe University, Frankfurt (Germany)

〔図書〕(計 5件)

Hieda, Osamu. (ed.) 2015. *Information Structure and Nilotic Languages*.

(Studies in Nilotic Linguistics vol. 10). pp. 239. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Koenig, Christa, Heine, Bernd & Karsten Legere. 2015. *The Akie Language of Tanzania. A Sketch of Discourse Grammar*. (Studies in Nilotic Linguistics vol. 9). pp. 182. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Hieda, Osamu. (ed.) 2014. *Recent Advances in Nilotic Languages*. (Studies in Nilotic Linguistics vol. 8), pp. 136. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Hieda, Osamu. 2013. *A Grammar of Kumam: The interaction between syntax and pragmatics*. (Studies in Nilotic Linguistics vol. 7), pp. 382. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Hieda, Osamu. 2013. (ed.) *Michael Noonan's Linguistic Materials of Lango*. (Studies in Nilotic Linguistics vol. 6), pp. 250. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稗田 乃 (HIEDA, Osamu)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：90181057

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

河内 一博(KAWACHI, Kazuhiro)

防衛大学校・総合教育学群・准教授

Koenig, Christa

ゲーテ(フランクフルト・アム・マイン)大

学(フランクフルト)・アフリカ言語学研

究所・研究員

Heine, Bernd

ケルン大学・アフリカ学研究所・教授